

ピンチの裏側

歴史的猛暑となった8月も終わり、今年も残り1/3となりました。まだまだ暑い日々が続くと思います。夏の疲れがでやすい時期ですので、お身体にはくれぐれもご留意くださいませ。

さて、夏の甲子園の高校野球では「佐賀北高校」が見事に全国制覇しました。大会前には全く優勝候補には挙がっていなかったごく普通の公立高校が、開幕試合勝利、引き分け再試合や優勝候補の帝京を延長13回の末破るなどのミラクルを連発し、決勝戦では8回の裏奇跡の逆転満塁ホームランと、高校野球ファンにとっては記憶に残る歴史的快挙を成し遂げました。

決勝戦での8回裏の攻撃時の応援は正に地鳴りそのもので、タイガースの応援とは異質のものを感じました。いくらエリートとはいえ、高校生のピッチャーには多少の動揺(押し出しファールボールの微妙な判定も?)があったのかも知れませんが、あの場面で打った副島選手は立派でした。甲子園に来るまで公式戦ではホームラン0だった選手が、甲子園でいずれも大事な場面でのホームラン3本は、普段の努力が成果となって表れたのだと思います。

佐賀北高校は県立の進学校で、練習時間は一日3時間程度、グラウンドはサッカー部との共有、部の予算も少ない。選手は全員県内出身で、身長はレギュラー選手の半数は170cm以下と小柄な選手が多く、先発ピッチャー馬場投手はわずか163cmしかありません。環境も体格も決して恵まれているとはいえません。

しかし、佐賀北の快進撃は決して「まぐれ」ではなく、普段の練習での成果が本番で発揮されたものといえます。特に印象に残っているのは、準々決勝の帝京戦での守りでした。1点が勝敗を左右する延長に入ってから帝京の2度のスクイズを、久保投手が絶妙なグラブトスでホーム寸前でアウトにしたプレイは見事でした。キャッチャーも体を張ってホームインを阻止しました。グラブトスは普段練習の最後に必ず採り入れていたようです。あの大舞台の緊迫した場面であのようなプレイはなかなか決められるものではなく、1度ならず2度までも失点を防いだことは、冷静な判断と集中力、それに普段の地道な練習がなければ出来るものではありません。

延長15回引き分け再試合を含め、7試合を戦い、合計73イニングは大会新記録だそうです。この猛暑の中、集中力が途切れることなく、なぜあれだけのプレイができたのか。数少ない練習時間の1/3をダッシュなど基礎体力向上の為に割っていたそうです。グラウンド事情もあったかもしれませんが、地味な練習の積み重ねが甲子園での成果につながったものと思います。昨夏の県大会で初戦敗退という悔しさが、もう一度原点からやり直そうという機運につながったのでしょうか。リリーフ投手の久保投手は、甲子園で34回1/3を無失点で切り抜けられたのは、固い守りのバックを信じて打たせて捕る投球を続けた、チームへの信頼の証です。

都心と地方の格差が叫ばれる昨今、純血の地方の高校が都心の野球エリート校を打ち破る姿は、多くの国民の共感を得たと思います。佐賀北高校には全国から2000件を超える寄付や祝儀が殺到し、同校は観光スポットにもなり、道を尋ねる人が絶え間ないそうです。大会前は「特待生」問題で揺れた高校野球ですが、「特待生」とは無縁の県立高校が全国制覇したことは、「郷土の代表」「文武両道」という「高校野球」の原点を見た気がします。佐賀北高校の野球部の部室前には次の言葉が掲げられています。

【ピンチの裏側】 神様は決してピンチだけをお与えにならない ピンチの裏側に必ずピンチと同じ大きさのチャンスを用意して下さっている 愚痴をこぼしたり やけを起こすと チャンスを見つける目が曇り ピンチを切り抜けるエネルギーさえ失せてしまう ピンチはチャンス どっしりかまえて ピンチの裏側に用意されているチャンスを見つけよう。

帝京戦での13回表、センターの身長165cmの馬場崎選手が帝京の大飛球をフェンスにぶつかりながら好捕し、その裏の攻撃でその馬場崎選手が見事にサヨナラのホームを踏みました。正にピンチの後チャンス。「やればできる、感動をありがとう！」 by. 元公立高校の球児